

週日の説教

金 大烈 神父 2010年9月10日(金)

《“肯定の力”を信じましょう》

主の平和

今日はちょっと空が高く思えて、ようやく秋になった感じですね。しかし、すぐ暑さが戻るかも知れませんが、油断しないでお体を大切にしてください。

今日の第一朗読(1コリント9・16-19、22b-27)は家に帰ってもう一回ゆっくりと読んで頂きたい内容です。今は別の話をしますので、詳しい説明は省略しますが、ちょっと触ってみましょう。気になった箇所です。『競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するのです。』という使徒パウロの言葉です。そして、もう一つ気になった言葉として『福音のためなら、わたしはどんなことでもします。』これらの言葉を考えてみますと、私達の信仰の生活がどうなっているか、わきまえるための模範的な言葉ではないかと思ってみました。

さあ、福音(ルカ6・39-42)に入ってみましょう。

福音では、私達が痛みとして思っているところに触っています。どういうことかということ、自分の目の中にある丸太には気がつかないで、他人の目にあるおが屑をあれこれ言っている私達に、『まず自分の目から丸太を取り除け。』とイエス様がおっしゃっています。この福音を読んで、イエス様がおっしゃっているこの言葉を何回聞いても、これは正しいことだと分かっている、認めてはいるのですが、今日はちょっと逆に考えてみました。

もし、人間という存在そのものが、自分の中にある丸太よりも他人のおが屑がよくみえる存在だったら、それはしょうがないこととして認めましょう。認めて“肯定の力”を信じましょう。肯定とは否定の反対語ですよね。ですから、相手のおが屑が見えるのは当然なこととして認めましょう。そして、その人の目にあるいいものをも見つけましょうということです。**相手の目におが屑がみえます。たまには丸太も見えます。もっと大きい何かが見える時もあります。けれども相手のことをよく見ようとする力を私達が持っていれば、相手のいい点も見えるのではないのでしょうか。**私達は誰でもそういう弱さを持っています。自分の間違いには気がつかないほうが楽でしょう。気がついたら辛いですよね。ですから、私達は無意識的にも自分が間違えたところ、いわゆる丸太を、できるだけ気がつかないように、自分自身の頭が、心が、動いているのです。

もちろん、私達がいつか本当に信仰的に「ああ、至る所まで来た」と、そのように言われるためには、自分の中にある丸太を取り除かなければならないことは明らかな事実です。しかし、その取り除く方法を、自分の心を痛めながらも、なくそうとすることよりも、相手のいいところを見よう、見ようとする努力によって、自分も知らないうちに自分の中にある丸太が、取り除かれるのじゃない

かと考えてみました。そうじゃないでしょうか。「ああ、あの人が本当に素晴らしい、素晴らしい。」と毎日自分自身にうた謳うと自分の中にある汚い心が清められるのではないのでしょうか。あの人にあるいいところをよく見ようとすれば、「自分でも気がつかないうちに綺麗になる」そういうところがあるのではないのでしょうか。もし私達がこのような心で、相手の短所に囚われないで長所をみようとするとその努力がお互いにできれば、そして、お互いに出来なくても誰かがそういう目でみようとすると始まりがあったら、それはやはり少しずつ、少しずつどんな関わりでも肯定的に変わるのではないかと、今日の福音を読んで考えてみました。

なによりも結論として、私達は否定的なところをわざわざ触れようとする心よりも、肯定的なところを触ろうとすることがもっと効果的ではないかと思ったことです。ですから、皆様お願いします。“肯定の力”を信じましょう。その力によって私達がお互いに福音的に変わることが出来る、その希望をしっかりと持ちましょう。

さあ、もう一つ、今日は福者達が殉教の栄光の冠を頂いたことを祝う日です。共に黙想したのは召命のことです。この日本の国のために、また御国のために殉教された私達の先祖が、今を生きている私達を見て一番望んでいることは何かと考えて見ました。自分達の血を流して守った信仰が無駄にならないように、イエス様が約束なさった実りが何百倍、何千倍もあるように願う心だと思います。それがためにはやはり私達の教会が、生き生きしなければならぬと思います。償いも犠牲もし、もし必要なら自分のものを捨てなければならぬと思います。それが教会を生かせる方法だったら、それがどんなことであってもやらなければならぬと思います。結局教会は、どうしても導く者が必要です。その導く牧者の役割、その役割はやはり司祭達ではないかと思います。

一年前から司祭達のために、うちの共同体は「ミサ後祈りを捧げます。」というその内容もこのような同じ文脈で申し上げたことです。

司祭達がちゃんとその牧者としての役割に立つ姿を見せるためには信者さんの心を込めた祈りが何よりも必要です。そういう意味で祈りの力を信じながら実践しましょうという願いでした。私も司祭として率直にも申し上げますと、息苦しく思う時が本当にあります。「一人で頑張ってもどうなるか、後はどういうことになるのか」と。そのような戸惑いとか心の痛みがあります。しかし“肯定の力”を信じるべきだと思います。

私達の教会は日本全体から見れば小さな教会かも知れません。しかし、この小さい共同体でも私達が「塩やろうそく」の役割が少しでも出来れば、そして、私達によって司祭になりたい気持の子供達が育って来たら、それによって何か変化も起きてくると思います。

皆様、毎日の祈りの中に必ず入れて頂きたいのは“召命の祈り”です。そして、今、召命の招きに応えて生きている人々が、がっかりしないで自分達に与えられたその召し出しの意味とか、固い決心とか、そして進む強い力が与えられるように、祈ってください。

ありがとうございました。